今年度も引き続き、校長室から日頃の「雑感」をお届けいたします。昨年度は例年以上に数多くの生徒の皆さんが校長室に足を運んでくれ、大会報告や各種イベント案内など、様々なお話を聞かせてくれました。教育活動はもちろん、そうした生徒の皆さんとの談話等も交えながら綴ってまいりますので、ご笑覧いただけましたら幸いです。

One for all, All for one.　№126

R7. 2. 3　「エッセイコンクール」

特進コース２年生４名の皆さんが、昨年公募のあった「第 13 回井上靖記念館エッセイコンクール」で見事入賞を果たしました。今回の共通テーマは「遊」です。

田中　夏海さんは「コロナ禍と今、私と遊び」と題し、コロナの流行で通常のコミュニケーションが難しい中、自身の「遊び」に対する感情が徐々に変化していく心の機微を綴っています。「コロナ禍で友人と直に接する機会がなくても、自分なりに楽しみを見つけようとする『遊び心』を持っていることに気づきました。今、その『遊び心』を思う存分開放し、友人と一緒にいる時間はとても豊かな時間だと感じています」と語ってくれました。『遊び心』を持ち、自由に積極的に楽しもうという思いを大切にしていきけば、どんな苦境も乗り越えれられそうです。

入山　夏帆さんの『至福の時間』は、動物園ガイドの説明に新しい発見をいくつも見出し、動物への感情移入がさらに深まっていくという内容です。「自宅を離れ学習や部活動で忙しい中、休日に動物園に足を運び、ガイドの方の話を聞きながら動物の生態を観察する時間がとても幸せなんです」と楽しそうに語ってくれました。専門家の話に真摯に耳を傾け、様々な疑問を解消し、深い理解をもって動物に向き合うことの大切さを、私自身学ばさせていただきました。入山さんの作品は「ナナカマド賞」という特別賞にも輝きました。

尾形　幸奈さんの「初心に帰れる小児科病棟」という作品には、自らの入院体験で実感した想いが綴られていました。「入院している子どもたちは闘病期間も長く、普通の子供たちのように長時間『外』で遊ぶことができません。それでも院内で年齢に関係なく楽しめる遊びやリハビリ的スポーツを通して、本当の意味での『楽しさ』を味わうことができました」と当時を振り返ります。ある体験がきっかけとなり物事の本質に気づいたこと、そして今度は、そうした環境を作り出す医療従事者側を進路目標にしたことなど、とても運命的なものを感じます。

鎌田　百羽さんの作品は「花火より奇麗なもの」という題でした。部活動の長期遠征のために楽しみにしていた花火を見ることができませんでしたが、遠征を通して自分や仲間が少しずつ成長していく姿に心を動かされたというお話でした。「最初は強豪校相手に何もできずにいましたが、一人一人が徐々に声を出すようになり、動きにもメリハリがついて切れ味鋭い技が繰り出されるなど、チームメイトの眩しいばかりの成長が、花火以上に

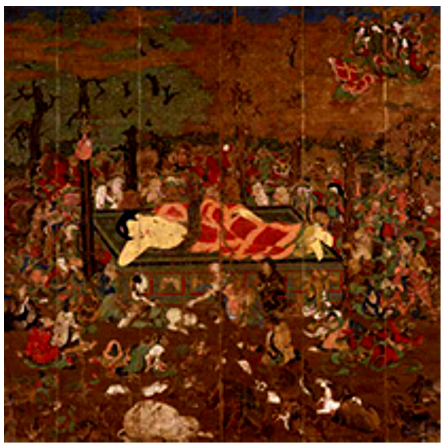
美しく感じられました」と目を細めます。奇麗と感じるのは視覚的なものばかりではありませんね。

受賞作品は全て読ませていただきましたが、皆さんの研ぎ澄まされた感性に改めて驚かされます。今後も様々なことにチャレンジしながら、あらゆる感情を実感して欲しいと思います。

One for all, All for one.　№127

R7. 2. 5　「涅槃会」

「涅槃会」は、お釈迦さまが入滅された日をご縁として勤められる法要です。お釈迦さまは 29 歳で「出家」され、35 歳で「悟り」を開かれ、以来 45 年間「み教え」を説かれ、80 歳で「入滅」されました。



本日はインフルエンザ拡大防止を考慮し、放送にて法要の儀を執り行いました。

法話では、宗教部教諭 藤平 竜多先生が「『南無阿弥陀仏』の『南無』は『かえるいのち』のことで、言い換えると「尊敬しますとか帰依します」という意味になります。私たちが阿弥陀仏を信じ、帰依することが、そのまま本尊の内容となっているのです。私たちにできることは、阿弥陀仏の救いを受け入れ、静かに南無阿弥陀仏と称えること以外にはありません」とお話されました。